

児童館における事故の実態に関する研究

(分担研究：小児の障害につながる傷病に関する研究)

高野 陽¹⁾、斉藤 歎 能²⁾

高城 義太郎³⁾、荻須 隆雄³⁾

要約：昭和58-61年においては災害保険対象となった事故について調査し、児童館における事故防止・安全教育のあり方を検討することを目的とした。3年間に231件の事故が報告されており、男児と小学校低学年に多発している。4月に最も多く、発生の時間は、午後2時から5時が多い。事故では、転倒事故が最も多く、保険対象では骨折が最も多い。原因として、遊具により多く発生しており、児童館の指導の充実が望まれる。

見出し語：児童館 事故 転倒事故 骨折

研究方法：児童館は、児童福祉法に基づいて設置されており、遊びを介して児童の全面発達を援助し、健全育成を目的としている児童福祉施設である。約4000か所の児童館が全国に設置されているが、そこでは、児童は安全に過ごせることが期待されている。しかし、児童の事故は、児童が生活しているいたる所で発生しているわけで、児童館においても、現実に発生し、傷害保険の対象となっている。

児童館における事故防止と安全教育の確立を図るためには、その実態を明らかにする必要があり、全国児童館連合会の協力のもと、同会が傷害保険業務を委託している保険会社に提出された事故報

告書を資料に、昭和58-61年の3年間に発生した傷害保険対象の児童館にかかわる事故について分析した。

結果：上記3年間に発生した傷害保険対象の事故は、231件で、児童館の建物内の事故だけではなく、通館中の事故も含まれている。男児161件・女児70件で、小学校低学年に多い。

事故発生は4月に多く、5・7及び8月に多いが、冬季や6月に少なくなっている。発生時刻は、表1のように午後2時から5時にかけて多く、午前中は幼児に多い。

事故の種類は、表2に示したように、転倒事故が最も多く、次いで、転落・衝突事故と続いている。

1) 国立公衆衛生院 (Institute of Public Health) 2) 横浜国立大学 (Yokohama National Univ.)
3) 玉川大学 (Tamagawa Univ.)

る。物に指を挟んだり、動物や人に噛まれる事故もあり、その種類は多岐にわたる。事故は、児童の年齢や発達状態と密接な関係があるが、転倒事故はどの年齢にも多いが、11歳に最も多く発生している。衝突事故は、対人・対物衝突があるが、年齢による差は認められない。

表3は、傷害別の発生状況を示したものであるが、骨折が保険対象の事故として最も多いことがわかる。なお、ここに示した傷病名は、報告書に書かれていたものをそのまま示したものである。受傷部位は、表4に示したように、身体各部に広く分布しているが、年少ほど上半身に多く、幼児や小学校低学年では頭部に多い。上肢の傷害が多いのは、指を挟んだりする事故が多いためである。

骨折の発生は転倒事故にみられることが多く、切傷のなかには、口の内の切傷も多く、主として、衝突事故によって発生している。

受傷時の受診医療機関は、病院と診療所との割合には殆ど差がないが、接骨医に罹ったものが1.4%いた。

事故の発生場所は、表5にみられるように、館舎内で6割を占めており、道路など戸外では、通館途中の事故もみられる。館舎内では、活動的な行動をとる部屋などでの発生が多いことはいうまでもないが、次いで、玄関・階段など公共的な場所となっている。比較的的非活動的行動をする場所と思われる図書室でも発生しており、幅広く安全管理が必要であることを示唆している。一方、館舎外では、館庭での遊戯中の発生が多いことは当然であるが、門・花壇などでも発生していることは注意しておきたい。

事故の原因と考えられる物体の種類をまとめる

と、表6に示したようになる。遊具が最も多く、次いで、建造物となっている。建造物では、ドア・窓に指を挟む、階段から転落する、柱に衝突するなどの事故があげられている。動物による事故は、蝮や犬に噛まれたものが報告されている。

遊具のなかでは、卓球台によるものが最も多いが、これは、卓球台の据え付けのために、運搬しているときとか、台を組み立てているときの事故である。トランポリンは、児童に人気のあるものであるが、それによる事故が多く、一輪車も同様に、その事故は屋外・屋内を問わず発生している。屋外では、滑り台からの転落が最も多く、鉄棒・ジャングルジムなどによる事故の頻度も高い。

考察：児童の事故は、死亡事故の原因追及だけでは防ぐことはできぬ。死に至らぬ事故では、時に肢体不自由や情緒面の障害をもたらすこともある。その意味では、事故防止は、児童が生活しているあらゆる場面で実践されなければ意味がない。特に、異年齢の児童が多数集まる場所においては、事故の実態を確実に把握するとともに、その防止に対して十分な配慮が必要なことをこの研究が示している。

さて、児童の事故防止対策としては、事故の原因となる要因の除去・環境の整備さらに対象者への対策の三点があげられる。児童館においてもこの三原則は守られるべきである。それ故、来館者の条件によって、事故の実態が異なることを認識し、常にその対策を怠ってはならぬ。例えば、来館時間との関係でみれば、午後2-5時は、学校からの帰宅後または帰宅途中で、学校での生活や疲労状態を配慮した遊びの指導が望まれる。また、児童のなかには、事故多発児といわれるものがい

るはずであり、児童館においてもその視点から児童の行動に関心をもつ必要がある。

児童館の目的からいって、遊びの指導は適切であろうが、慣れてくれば、児童だけで遊ぶことも多く、正しい遊具・道具の使用方法が徹底されないこともあるので、指導に当たるものの注意が望まれる。児童館では、異年齢の児童が集ってくるので、指導者は、その点の配慮を怠ってはならぬ。環境の整備は、職員の責任であろうが、児童にも潜在危険の発見などに関する指導を徹底しなければならぬ。また、虫・動物など危険が予想されるものの駆除も忘れてはならぬ。児童館では、各種イベントが開かれるが、安全教育・事故防止

に関するものは少ないので、適宜取り入れていくような配慮も必要であろう。特に、4・5月に事故が多く発生しているので、新学期などには必要であろう。その時期は、職員にも「動き」があり、事故多発につながる条件といえよう。また、職員も事故防止の研究を怠ることなく、さらに、救急処置に関する研修も徹底すべきである。

児童館における事故について、傷害保険対象を中心に述べた。これらは、氷山の一角であろう。事故を未然に防ぐ能力を身につけさせることは、健全育成の重要な場面である。その意味からも、児童館の果たす役割は大いものと期待できる。

表1 時刻別発生状況

時刻	件数(件) (%)
7……8	2 (0.9)
8……9	3 (1.3)
9……10	10 (4.3)
10……11	14 (6.1)
11……12	22 (9.5)
12……13	6 (2.6)
13……14	16 (7.0)
14……15	33 (14.3)
15……16	50 (21.6)
16……17	62 (26.8)
17……18	7 (3.0)
18……	6 (2.6)

表2 事故の種類

種類	件数(件) (%)
転倒	74 (32.0)
転落	45 (19.5)
衝突	45 (19.5)
接触	24 (10.4)
挟む	19 (8.2)
落下物	14 (6.1)
他	8 (3.5)

表3 傷害の種類

傷害	件数(件) (%)
骨折	69 (32.7)
捻挫脱臼	10 (4.7)
裂傷	31 (14.7)
切傷	42 (19.9)
打撲	23 (10.9)
熱傷	4 (5.9)
挫傷	18 (8.5)
他	14 (6.6)

表4 受傷部位

部位	件数(件) (%)
頭部	31 (12.8)
顔面	47 (19.3)
体幹部	45 (4.5)
上肢	100 (41.2)
下肢	54 (22.2)

表5 発生場所(1)

場所	件数(件) (%)
建物内	145 (62.8)
館庭	50 (21.6)
敷地外	27 (11.7)
他	9 (3.9)

表6 事故発生の主な要因

建物	24件
(ドア・窓・階段・柱)	
屋外施設	7件
(花壇の石・テントの支柱)	
遊具	55件(内)
(卓球台・トランポリン)	
遊具	28件(外)
(滑り台・一輪車)	
保育用具	11件
(椅子・机・オルガン)	
玩具	8件
(ラケット・ボール)	
工作用具	4件
(小刀・カッター)	
他	14件
(ビンのかけら・動物)	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：昭和 58-61 年においては災害保険対象となった事故について調査し、児童館における事故防止・安全教育のあり方を検討することを目的とした。3 年間に 231 件の事故が報告されており、男児と小学校低学年に多発している。4 月に最も多く、発生の時間は、午後 2 時から 5 時が多い。事故では、転倒事故が最も多く、保険対象では骨折が最も多い。原因として、遊具により多く発生しており、児童館の指導の充実が望まれる。